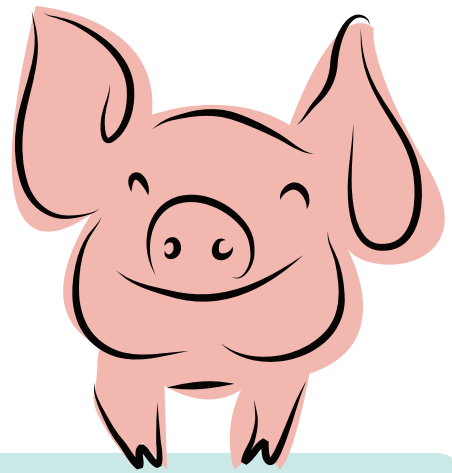


# ちょっと ブレイク しませんか?

## 第45回 「ベイブ」(1995年)



イソップ寓話「仔豚と羊」では「仔豚が羊の群にまぎれこんで草を食べていた。ある時、羊飼に捕まったので、泣き叫び逆らっていると、羊達は仔豚が泣くのを咎めて『わたしたちもいつも捕まっているのに、泣きわめいたりしないでしょ?』と言った。それに対して仔豚の言うには『僕と君たちとは、捕まる意味が違う。君たちが引たてられるのは羊毛か乳のためだが、僕の場合は肉のためだ』と記し、財産の危険どころか命の危険のある人が泣き騒ぐのは当然だ』と諭した。「豚と犬」では豚と犬が噛み合っていた。吠えるのを止めるなら、牙で引き裂いてやる、と豚がアフロディア女神にかけて誓えば、犬の方は、それこそ見当ちがい、アフロディアは豚を憎み、豚の肉を食べた者には神殿に入るのを禁じているほどなのに、と言う。すると豚が切り返して言うには『君、君、女神は私が憎いからではなく、私を生贄に殺させない用心のために、そうしていなさるのだよ』と記した。

コロナ禍で疲れ気味のところに蒸し暑い夏の到来。ご覧になった方もおられるかと思うが、映画「ベイブ」(1995年 濠太刺利・米国)を紹介したい。立派な牧羊犬ならぬ牧羊豚になることを夢見る無垢な子豚の奮闘記だ。子豚のベイブは、収穫祭で「仔豚の体重当てコンテスト」の賞品として老いた農場主に引き取られた。農場には様々な動物たちが色んな取り決めの中で共生していた。牧羊犬フライは、母恋しいベイブを子犬たちと一緒に育てる。ある日牧場に羊泥棒が入った。ベイブは主人に急いで知らせた。それを契機に農場主はベイブに牧羊犬の役割を思い付く。犬を真似ても羊たちは一向に言うことを聞かない。だが老羊メーの助言に従うと羊たちが静かに整列した。それには農場主も満足したが、立場が脅かされたと感じた牧羊犬レックスは傷つく。ある日、野犬の群れが牧場に侵入しメーが殺された。農場主はベイブのせいだと思ったが誤解だった。農場主は、牧羊犬競技会にいよいよベイブの出場を決意。豚なのに家の中に入って可愛がられるのに嫉妬した猫が、ベイブに「豚は人間に食べられるために飼われているんだ」と難癖を告げる。ベイブはショックを受け失踪。翌朝発見されたが相当に参っていた。その時、無口なはずの農場主が歌って踊ってベイブを励ますのだった。何とか持ち直し競技会会場へ急ぎ出場が許された。何を思ったか牧羊犬レックスは羊たちの合言葉を聞き出し、ベイブに耳打ちするのだった。お陰で、羊たちはベイブの指示に従い無事に試技は終了。審査員は全員満点を付け拍手喝采でベイブと農場主を讃えた。めでたしめでたし!

2018年秋～翌年の春にかけて豚コレラが大流行。賭博好きの友人が馬券を買う時は常に豚カツを食べていた。その意味が分かる人はもう爺さん。感染豚の殺処分は残忍だ。犬でも豚でも牧羊すれば良しとするのも身勝手過ぎる。コロナ不況で失業し、おまけにコロナ感染していた黒人が官憲に殺された。その二重差別に対する抗議デモが展開されている。Covid-19も撲滅ではなく共生の対象だ。イソップは「賢い弁士はしばしば敵の繰り出す非難を賛辞にすり変えてしまおう」と諭した。強気の合衆国大統領も、この寓話を真先に読み、そして「ベイブ」も見なくては次がない。



かゆ かわ ゆう へい  
粥川 裕平  
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授  
かゆかわクリニック院長